

# ニッポン

ドクター和の



# 臨終図巻

「治療法のない難病にかかるのは、医学の発達前の古代人になつたようなものと思つています。今ある姿を楽しむ『古代の心』をもつて暮らしましょう。」

「クイズ番組『クイズスター』の珍回答で人気だつた学習院大学の篠沢秀夫名誉教授の著書『命尽くるとも』に書かれていた言葉です。」

篠沢教授は2009年に筋萎縮性側索硬化症(ALS)を発症した後も執筆や講演を続けていましたが、10月26日に亡くなりました。84歳でした。

古代の人は、ああすればよかったとか、本当はこうしたいなど余計なことを考えず、あがまま生きてきた。だから

## 29 篠沢秀夫



長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。大阪第二医科大学卒業後、大阪府立第二内科局。1995年、京都府立医科大学で「在宅医療の総論」を執筆。著「痛くない死に方」は、関西国際大学客員教授。

教授が体に異変を感じたのは08年。まず、ろれつが回らなくなり、翌年1月にALSと診断されるも当初は病気を認めながらなかったそうです。

かし徐々に病状は進行し4月には呼吸が困難に。気管切開をして人工呼吸器をつけることを決断しました。ALSは、脳や末梢神経の指令を筋肉に伝える運動ニューロンという神経細胞が徐々に変性し、死滅していく病気です。走りにくい、箸が持てなくなつた、筋肉痛が治らない、びくびくするなどの手足の異変や、嘔下(えんげ)障害も初期症状として挙げられます。

進行のスピードは人それぞれですが、知覚神経や自律神経は侵されないのが、記憶や五感や知性は最期まで維持されるのもこの病気の特徴です。ですから教授も声は失つても、変わらぬ言語能力で執筆ができたのです。

ALSの原因については諸説ありますが、まだ不明です。進行を抑える注射薬が最近承認されましたが、根治療法はまだ見つかっていません。今後、遺伝子治療

に期待したいところです。〈古代の心〉を持つ一方で、教授は機械を上手に使つていたように思います。人工呼吸器はもちろん、自分の声を再現できる音声合成装置を使い、度々メディアで発言していました。積極的に仕事をこなし、奥様のサポートのもと、進行していく姿を堂々と見せていたことに、希望を持った患者さんとご家族は多くいるはず。

私も今まで約20人のALS患者さんを在宅で診てきました。まばたきでの意思伝達装置を上手に使い、おしゃべりを楽しむ人も。人工呼吸器は延命措置ではなく生活を楽しむための道具にすぎません。

〈古代の心と最新機器で、人生を謳歌おつかひしてほしい。不自由だけど不幸ではないことを、教授は教えてくれました。

訂正 10月6日発行の平尾誠二さんの記事「iPS細胞による世界初の治療」とあるのは、世界初の治療の誤りでした。

# 難病不幸にしない「古代の心」